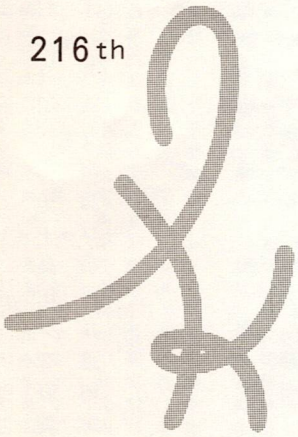
1991

平成３年

室内楽の夕べ

３ 月 24 日（日）
午後７時
市川市文化会館
小ホール

216th



市川市教育委員会
市川交響楽団協会
主 催

プ　ロ　グ　ラ　ム

F・J・ハイドン／交響曲　第94番「驚　愕」

J・S・バッハ／二つのヴァイオリンのための協奏曲

独奏　三原晶子
　　野口純子

―――― 休　　憩 ――――

W・A・モーツァルト／交響曲　第40番　ト短調　K 550

指揮　三原明人
管弦楽　市川交響楽団

本　日　の　出　演　者

コンサートマスター
松山和子

第1ヴァイオリン
亀井玲子
北　由美子
鳥塚昭子
長尾浩行
永田　匡
広浜浩司
福原祥子
三田村忠芳
山中慎一
渡辺千恵子

第2ヴァイオリン
飯島かおり
石本恵理
栗林えみ
堤　哲児
根守弘和
福井康祐
三田村真紀子
村上葉子
森田朋子
山岸万紀

ヴィオラ
遠藤利行
斎藤十一郎
高橋行継
中渡　孝
星　乗昭
村上賢一
横田行雄
渡部玲子

チェロ
倉沢由和
中村公一
樋口　進
福原耕一
山口勝之

コントラバス
鈴木重則
三輪泰之
村上信乃
季　隆子

フルート
木村純一
木村真諭紀

オーボエ
荒井　淳
森田直輔

クラリネット
田代安正
時田　雄

ファゴット
小島　厚
戸川安道

ホルン
越塚康央
河野和正
志賀恒夫
山口幸治

トランペット
一桝泰一
新井本昌宏

ティンパニィ
大川勝之

チェンバロ
藤田淳子

ご　あ　い　さ　つ

本日は私ども市川交響楽団第216回演奏会「室内楽の夕べ」にお越しいただきありがとうございます。今回は弦楽器中心の小編成オーケストラによる演奏であります。

曲目は今年没後200年を迎えるモーツァルトの交響曲第40番、びっくり交響曲で親しまれているハイドンの交響曲第94番「驚愕」、バッハの「2つのヴァイオリンのための協奏曲」の3曲であります。どの曲をとっても素晴らしい曲であり、楽しんでいただけるのではないかと思います。

今晩のみどころの一つはバッハの協奏曲ではないでしょうか。ソロは、本日指揮をしていただく三原明人さんの奥さんである三原晶子さんと、そのお姉さんの野口純子さんのおふたりにお願いしました。御夫婦、姉妹の呼吸がどれだけ合うか楽しみです。

春の足音が聞こえる今日このごろですが、今宵市響の演奏に何かを感じとっていただければ幸いです。

曲　目　解　説

交響曲第94番ト長調「驚　愕」　　F.J.ハイドン

ハイドンというと、日本ではモーツァルトやベートーヴェンにくらべて軽んじられる傾向がなきにしもあらずである。しかし、ソナタ形式を確立し、交響曲、弦楽四重奏曲の分野を開拓した功績はきわめて大きい。今宵演奏される94番は、ハイドンの最後を飾る一連の「ザロモン交響曲」12曲のうちの1曲である。

標題の「驚愕」とは、pで始まる第2楽章の16小節目に突然ffの全奏を加え、聞き手を驚かすというユーモアに富んだ思いつきからきている。この試みにハイドン自身すっかり満足していたという。いかにも彼の茶目っ気たっぷりの性格が表われているのではないだろうか。初演は、今から199年前になる1792年3月23日に作曲者自身の指揮によって行われた。楽器編成はフルート、オーボエ、ファゴット、ホルン、トランペット各2、ティンパニ、弦合奏である。いずれの楽章も、この大作曲家の円熟した技法を余すことなく発揮した作品である。

二つのヴァイオリンのための協奏曲　ニ短調　BWV 1043

J.S.バッハ

この曲は、バッハが室内楽の創作を精力的に行っていた、ケーテンの宮廷楽長を務めていた時代（1717〜23頃）に、当時流行していたコンツェルト・グロッソのスタイルに従って作られたものである。楽器編成はきわめて地味であるが、バッハの対位法的な技巧はとても優れており、多声的な構成と明確な生き生きとした律動を持った、美しく気品のあるものとなっている。

本日は独奏を、指揮者三原氏夫人・三原晶子さん、夫人の実姉・野口純子さんでお贈りいたします。

市響ストリングスも「気品」を表現しようと練習を積んできました。

―― 乞うご期待！

（文責：はじめての演奏会なのにハズレてしまった新入団員のVn. 鈴木）

交響曲　ト短調　K－550（第40番、新版第47番）　　モーツァルト

モーツァルトの作品は喜びや悲しみといった感情を直接表現しているケースは稀であるが「ト短調」はこの種の感情を反映した特別な調性だと言われている。ト短調の作品はいくつかあるがこの作品はその極致である。

作品は1778年7/25に作曲されたが、当初はクラリネットが入っていなかった。その後、自身により改訂がなされオーボエのパートを修正しクラリネットを追加した。最近の研究では、この曲がサリエリの指揮で演奏され、される際に改訂がなされたと言われている。今回は改訂版で演奏される。

第1楽章はヴィオラの伴奏にヴァイオリンの“ため息”を思わせる第1主題から始まり、続く第2主題は絶望感を与える。第2楽章は、ヴィオラから開始され感情の高ぶりをなだめ安らぎを与えてくれる。しかし第3楽章になると闘争ムードが戻り、続く第4楽章で感情も最高潮となりフーガを用いて緊張感を作りだし、曲を終止する。

さて、この交響曲の自筆譜は現在ウィーン楽友協会の図書館にあるが、その前の所有者はブラームスであった。　　Vn. Va　遠藤利幸

プロフィール

三　原　明　人（指　揮）

1961年東京生まれ。東京芸大でヴィオラを桐朋学園、シエナ、アッシジ、ウィーンで指揮を学ぶ。1989年オランダで行われた「第２回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクール」で第２位入賞、オランダ放送フィルを指揮してアムステルダムでデビュー。これまでにチェコスロバキア放送響、ブタペストＭＡＶ響、東京都響、名古屋フィル、広島響等を指揮、ウィーン・フィルでは故バーンスタイン氏のアシスタントも務めた。

三　原　晶　子（ヴァイオリン）

３才よりヴァイオリンを始める。
1978年　毎日学生コンクール高校の部西日本第１位。
1984年　芸大安宅賞受賞、芸大オケと協演。1985年　東京芸術大学卒業。
1989年　ウィーン国立音楽大学　ピヒラー教授のもとで研鑽を積む。
現在、東京都交響楽団第１ヴァイオリン奏者、ヨゼフ弦楽四重奏団メンバー。

野　口　純　子（ヴァイオリン）

４才よりヴァイオリンを始める。
東京芸術大学に入学後、学内定期演奏会、NHK FM「夕べのリサイタル」等に出演。
現在、東京都交響楽団第１ヴァイオリン奏者、ヨゼフ弦楽四重奏団メンバー。

予　告

第218回 市響　創立40周年記念

「日中交流交響楽コンサート」

―現代中国のオーケストラ曲と市響40周年―

日時：**平成３年６月２日　14時** 開演　　〔入場無料〕
場所：**市川市文化会館大ホール**
（ＪＲ、都営新宿線本八幡駅南口より徒歩10分）
曲目：青木暢男　　管弦楽曲「版画模様」（初演・邦人作品）
　　霍　存慧　　交響曲≪1976≫「忘難的年代」（中国人作品）
　　秦　咏誠　　声楽協奏曲「海　燕」（中国人作品）
　　佐藤　真　　カンタータ「土の歌」
独唱：本宮寛子（ソプラノ）　管弦楽と合唱：市川交響楽団協会
指揮：村上正治、金子建志
主催：市川市教育委員会、市川交響楽団協会　後援：千葉県教育委員会

御招待：５月10日までに往復ハガキで住所、氏名、年令を記入の上郵送して下さい。
〒272 市川市新田２－33－10
市川交響楽団協会 40周年コンサート係
問合せ先：市川交響楽団協会　村上正治　0473－78－1619
横田行雄　0473－72－0258